暗き闇夜に差す光3

No.6

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
暗き闇夜に差す光３

【Nコード】
N３８７４E

【作者名】
No．６

【あらすじ】
暗き闇夜に差す光の第3部。暗き闇夜に差す光の最終編。第２部で、祖父と母の話していた内容が気になって不安になっていた天涅だが、その話の内容を教えられる。第３部では天涅の重大な秘密が明らかに。そして、その秘密を聞いた後天涅が大変な事に！いったい天涅の秘密とは!?

第2部

八

「雨、激しいな。てっさんびしょ濡れになってなきゃいいけど。」
外から聞こえる雨音が、激しさを増していた。
「あいつは濡れても大丈夫だ。それより、さっき天涅君の様子がおかしかったと言っていたな。」
「でも、雨が嫌なだけだって。それに、変な夢見ただけだって言ってたし…って、てっさんがいる時そう言ったじゃん。」
もしかしてボケが始まったのかと思ってしまった。だが、次の言葉を聞いてそうではない事が分かった。
「それは分かっておる。ただ、それだけじゃない気はしなかったか？」
「はぁ？何で直接天涅を見てないじいちゃんが、そんな事聞くんだよ。別にいつも通りだったぜ、あいつは。」
「本当か？なら良いが。」
とかいっているわりに、眉間にしわが寄っている。悪い人相がもっと悪く見えてしまう。
「じいちゃん、何か気になる事でもあるわけ？」
「いや、なんでもない。」
そう言って立ち上がった。何故立ち上がるのかと不審に思って、目で追った。
「なんだ、光。じーっと見て。」
「別に。ただどこ行くのかなーって。」
「便所だ、便所。お前には関係ないぞ。」
「分かってるって。早く行けよ。」
「お前が引きとめたんだろうが。」
「違うって。じいちゃんが勝手にた…。」

ちどまったんだろ、と続けようとした時、電話が鳴った。あまりのタイミングの悪さに、居間にあるガラスケースの横の電話を睨んだ。
「光、出ろ。わしは便所に行く。」
そして、文句を言うまもなく、居間を出て行った。
「ったく、仕方ねーな。誰だよ、こんな時に。」
ブツブツ文句を言いながら電話に出た。
「もしもし？」
不機嫌そうに出ると、何分か前にこの家を出て行ったたてっさんの声がした。
『光か？おれだ。お前、天涅君の家の電話番号知ってるか？』
「え？何いきなり。」
『いいから、知ってんのか、知らねえのかどっちなんだ。』
「えっ、オレ知らねえけど。」
『じゃあ、おやっさんは？聞いてきてくれ。』
「いいけど、今トイレ行ってるぜ。なあ、てっさん。何かあったのか？いきなり天涅の家の番号聞いてくるなんて。」
『それがよう、おれがそこの家を出て歩いてたら、こんな雨ん中電柱にもたれて座り込んでる野郎がいやがったんだ。どっかのホームレスかと思って近づいてみたら、なんと天涅君だったんだ。凄い高熱で震えてたもんだから、慌てて救急車呼んだんだ。それで、今病院なんだけどな。天涅君の家にも連絡しておいた方が良いと思って、番号を聞いたってわけよ。』
そのてっさんの言葉を聞いた時、心底驚いた。嘘かとも思ったが、電話の向こうでガシャガシャとなる医療具のような音、慌ただしい靴音、救急車の音等が聞こえてきたので本当なのだと自覚した。
黙りこくっていたので、てっさんが声をかけてきた。
『おい、光？』
「てっさん、天涅は、天涅は大丈夫なのか？」
はっとして慌てて聞いた。
『ああ。医者の治療受けて今は休んでる。熱はまだ下がっていない

が、見つけた時よりは大分よくなってる。』
「そうか。なあ、天涅に何があったんだ？何でこんな雨の中倒れてたんだ？」
『いや、おれもよく分からない。おれがみつけた時意識を失っちまったから何も聞いてないんだ。』
「マジかよ…。絶対何かあったんだ。じゃなきゃこんな時間に、しかも雨の中外に出るわけ…あっ、そうだ。てっさん、傘は？天涅傘差してた？」
『いや、差してなかったな。』
「じゃ、じゃあ、怪我とかは？誰かに殴られたあととかは？」
『光、何を考えてるんだ。天涅君は誰にも殴られたあとなんてなかったし、怪我もしてなかった。おれはな、家の中で何かあったんじゃないかと思うんだ。』
「それどういう意味？」
そう聞いた時、いきなり後から声をかけられた。
「光。誰なんだ、電話の相手は。」
「うわっ！」
思わず受話器を落としそうになった。いきなり背後に現れないでほしい。かなりびびる。
「何だよ、じいちゃん。ビックリするじゃないか！」
「それより、電話の相手は？」
人の話を聞きゃしない。とにかく電話が気になるらしい。
「てっさん。あ、それより今気になるとこで話が途切れてたんだ！ちょ、ちょっと、てっさん？」
『ああ？おい、光。おやっさん来られたみたいだな。代わってくれ。』
「え！？その前にさっきの続きは…。」
しかし、じいちゃんに受話器を奪われ、続きは聞けなかった。
「くそー。そういえば、さっきてっさんが家の中で何かあったんじゃないかって言ってたな。もしかして、天涅のじいちゃんと何かあ

ったんじゃ・・・。」
そう言った時、電話を切る音がした。
「光。わしは、天涅君の家に行って来る。」
「え、今から?!しかも、病院じゃなくて天涅の家に?」
「ああ。お前は留守番しておけ。」
「何で、オレも行く!」
「お前は来るな。」
あの、人相の悪い顔で思いっきり睨まれた。何でこんなにも拒絶するのか分からなかった。でも、こういう顔をする時は絶対に背いてはいけないということを、今までの経験でわかっていた。だが、家の中にじっとしてはいられなかった。
「じゃあ、オレは病院に行く。それならいいだろ。」
「仕方ない。ならちゃんと厚着していけ。外は相当寒いぞ。」
「分かった。」
そして、厚手のジャンバーを着て、一緒に家を出た。それから、それぞれの行くべきところへ向かった。

　まさか、まさか本当にあの事を言ってしまったのか…。疑惑の念を抱きながら、両脇に構えている、まだ花のつかない金木犀の間を通った。
ビシャビシャと、庭にできた水溜りを踏んで、玄関に向って歩いた。すると、犬小屋の中から懐かしい犬の鳴き声がした。確か名前はチャコだったか。あいつが死んだ妻の代わりに、と飼っていたのに、血の繋がっていない孫に譲ってしまったのは一体どういう心境の変化なんだか。そういえば、天涅君にはよく懐いていると言っていたな。飼い犬に手をかまれでもしたのか。
そんな事を考えながら、玄関の右の柱に着いているインターホンを押した。すると、ピンポーンと間延びした音が鳴り止まないうちに、ガラッと勢いよく玄関が開いた。
「天涅兄ちゃん…じゃない。」

おそらく天涅君の妹であろう、まだ小学生ぐらいの女の子が出て来た。
「入っていいかね。」
少し腰を曲げて、極力優しげに言った。しかし、何が恐いのか恐れられてしまった。
「ひゃっ！お、おじいさん、誰？」
「君のおじいさんの知り合いだ。邪魔するぞ。」
とにかく玄関を勝手に閉めて入ってしまった。
「じいちゃんの知り合いの人？」
先ほどよりは恐がっていない風で安心した。
「ああ。おじいさんはいるかな。」
「うん。入っていいよ。」
そして、ようやく入れることになった。中に入るのは何年ぶりか。
「じいちゃんお部屋にいるよ。部屋はねー、この廊下の右側にあるよ。一番手前のやつ。」
玄関からでも斜め向こうに見える部屋を指して教えてくれた。そして、その子に礼を言うと、どういたしましてと言って先程教えてくれた部屋の、真ん前の部屋に入って行った。おそらく居間だろう。
誰もいないみたいに静かだった。
「さて。久々のご対面といくか。」
居間から目を反らして、目の前の部屋の前でそう言った。そして、声もかけずに襖を開けた。
「よう、コシバ。」
襖を閉めてから、驚愕の表情をしている相手に言った。
「な、何故貴様がここに…。」
「貴様って何だよ。久々似会った友に言う台詞か？」
コシバが座っている前にどかっと腰を下ろした。
「と、友だと！」
嫌そうに顔をしかめた。
「馬鹿言え。わしが言った友は、敵という意味だ。」

不適に口端を吊り上げて言ってみせた。
「くっ、貴様、何しに来た。」
「天涅君の事だ。」
声音をかえて、ドスの利いた声で言った。コシバはビクッと肩を震わせた。
「コシバ、天涅君にあの事を言ったんだろう。」
「それが、貴様に何の関係があるんだ。」
「何の関係だと？言っとくがな、天涅君と双子の光を育てているのはわしだ。光も大事だが、その兄弟の天涅君も大事に決まっているだろうが。それに、赤の他人と言い切ったお前より、わしは天涅君の事を考えている。
お前の娘が天涅君を育てると言った時、許可をしたはずだ。当然お前は天涅君を自分の孫同然に思うはずだろう。それにお前の娘はここじゃなくて、夫の実家で育てた。なんの迷惑もお前にはかかっていないだろ。それなのに、天涅君にこれから赤の他人だと思えと言った。それに何故、今日本当の事を言ったんだ。今の天涅君の年頃がそれを聞いたらどうなるのか分かっていたんだろう。なのに何故だ、答えろ。」
コシバから目を反らさず言った。
「確かに、娘があいつを育てるのを許可はした。だが、自分の孫だと思うとまでは言っていない。まあ、一応あいつは他人(ひと)に好かれるところがあったから、そこをかっていた。だが、ここに来た時にはそんなのはとっくに消え失せていた。だからもう完全に孫だとは認められなかった。それであいつに赤の他人だと言った。
それにだな、今日あいつに本当の事を言ったのは、娘夫婦がそうすると言ったからだ。貴様にごちゃごちゃ言われる筋合いは無い。」
酷く腹の立つ物言いだった。
コシバとは古くからの幼馴染だ。しかし、相当悪い間柄だったが。
コシバは昔から頭は切れるが、腹黒く性格もねじれていた。だから一番嫌いな相手だった。（今でもそうだが。）高校までずっと同じ

で家も近かったのだが、高校を卒業してからは別々になった。それから何十年と会っていなかったのだが、ここら辺で組を構えて頭になった時、またコシバと会った。会った瞬間口喧嘩をしてすぐ別れた。
そんな事があってから何年か後、コシバの娘がある赤ん坊を預けられたと噂に聞いた。そして、それと同時に自分も光を拾った。その時は単なる偶然かと思って気にせずに育てた。
しかし何日か前、わざわざコシバが家を訪ねてきた。何の用かと思っていたら，天涅君を預けた母親の手紙を持って来ていた。コシバが、お前のも見せろと言ったのでしぶしぶ見せると、コシバが持って来た手紙の文字と、自分が持っていた手紙の文字がどこからどう見ても同じだった。これは偶然ではないと気付いき、二人は兄弟だということが判明したのだった。そしてコシバは何も言わず出て行った。その時少し疑問に思ったのだ。何故今になってわざわざ確かめに来たのか。嫌な予感はしていたのだが、そのまま何もせず放っておいた。しかし、それが今になって悔やまれた。まさか本当の事をもう話してしまうとは。
「何故お前はあの時わざわざ家に来て、天涅君と光が兄弟だという事を確かめに来たんだ。それに、何故いきなりお前の娘夫婦はそうすると言ったんだ？まさかお前、娘に何か言ったのか？」
「ああ、言った。でも、わしだけじゃない。娘の夫も言ったんだ。」
「何をだ。」
嫌な予感がした。天涅君がやってしまった事は、光から聞いていた。そのせいで、父親からも、弟からも冷たく対応された。ましてや母親も、距離をおくようになったと聞いていた。まさか、あの事なのか。
「何故、そんな事まで貴様に言わないといけない。」
冷たく、落ち窪んだ目をしてコシバが言った。
「この野郎！」
その目が、言い方が気に食わなくて思わず、襟をギュッと掴んでい

た。
「吐きやがれ。何を言ったんだ。」
「くっ、そうやって、貴様はいつも手を出して、暴力で解決しようとする。昔からいけすかなかったんだ。」
「てめえ、いいから早く言え！」
もっと強く掴んだ。
「は、離せ。く、苦しいだろうが。」
本当に苦しいのかどうか怪しかったが、離してやることにした。
「さあ、早く言うんだ。」
「……、と言ったんだ。」
畳に両手をついて、顔を下に向けて言った。
「何て言ったんだ、聞こえなかったぞ。」
すると、体勢は変わらぬまま、顔だけ上げて、こちらを見て言った。
「あいつは、恩をあだで返す奴なんだ。そんな奴を育てても無意味だと言った。」
「何っ、お前そんな事を…。」
「ああ、そうさ。それに、娘の夫も、あいつにはうんざりしていたんだ。今まで世話になっておきながら、最期に一目会いたいと言っているじいさんに会いにすらいかなかった。そのせいで、自分も父親の死に際を見られなかったと悲しんでいた。だから、もうあいつの事は捨てろと言ったんだ。そして、わしと夫に言われつづけた結果、娘はあいつを手放すことにしたんだ。」
「てめえは、人情のかけらもねえんだな。なんて野郎だ。」
悪魔だ。こいつは悪魔だ。
「人の道を外れたヤクザの貴様には言われたくないわ。」
お互い、しばらくの間睨みあった。
「おい、もう一つの疑問にも答えろ。お前がわざわざ家に来て、天涅君と光が兄弟だという事を確かめに来た理由は何だ？」
「別に理由など無い。娘が、貴様が育てている子供と、自分が育てている子供が双子なのではないかと予想したから、それが正しいか

どうか確かめようとしただけだ。それを確かめてから、あいつに話そうと思っていたからな。まあ、確かめたところで、どうという事はないが。」
「…そうかい。おい、今天涅君がどうしているか知らないだろ。」
「貴様が知っているとでもいうのか。」
「ああ。今は病院にいる。雨の中、倒れていたらしい。お前が本当のことを残酷に言ったからだろ。だからショックを受けて、家を飛び出した、違うか。」
「違う。家を飛び出したのは、娘のせいだ。天涅の事で責められるのはもう我慢できないと言ったんだ。それで飛び出した。」
「何！？しかし、責めたのはお前だろ。結局はお前のせいじゃないか。もういい、お前がどれほど最低の奴か分かった。人間のくずだ。」
吐き捨てるように言って立ち上がった。そして、コシバに背を向けて出て行こうとした。しかし、聞き忘れたことを思い出して、振り向かずに言った。
「天涅君はもうこの家の、いや、お前の娘夫婦の子供じゃないのか？」
「そうだ。自分から出て行くと、あいつが言ったんだ。」
「分かった。なら、天涅君はこれからわしが面倒を見る。娘夫婦に伝えておけ。それと、天涅君の妹にも、もう兄は帰って来ないと言っておけ。」
それだけ言って、襖を開けて部屋を出た。
そして、玄関に行く前に、居間の襖を少し開けて中を覗いた。誰もいないと思ったが、よく見てみると待ちくたびれたのか天涅君の妹は横になって眠っていた。
「もう、天涅君は君の兄ではなくなる。かわいそうに。」
そっと呟いて、襖を閉めた。
　玄関を開けると、凄い勢いで降っていた雨が、少し弱まっているのが分かった。しかし、まだ雨脚は強い。傘を開きながら舌打ちを

して、一歩庭に踏み出した。そして、天涅がいる病院へと向った。
「あ、あの、望月天涅の病室はどこですか？」
病院に入ると、受付の人に急いで聞いた。
「望月天涅さんは…３１５号室です。」
愛想の良い笑みで看護婦が言った。今日は笑みを返している余裕も無く、短く礼を述べてから、３１５号室に行った。
そして、素早く目的の場所を見つけて入った。この病室は個室らしく、ベッドが一つだけあり、その横にはてっさんが居た。
「てっさん、天涅は？」
「おお、光。来たのか。天涅君は大丈夫だ。今は安定してきてぐっすり眠ってる。」
ベッドの中を覗くと、天涅が寝息を立てて眠っていた。
「なんだ。良かった。」
「ここに座れ。」
てっさんが椅子を差し出してくれた。
「サンキュ。あ、そうだ、てっさん。さっきの電話の続き教えてよ。」
「続きって、どこまで話した？」
「天涅が道端に倒れてた理由は、家の中で何かあったんじゃないかってとこ。」
「ああ、その事か。おれも詳しいことは分からない。ただ、あんなに雨が降っていたのに傘が無かったし、こんなに寒いのに厚着もしてなかったから、家を飛び出して来たんじゃないかと思っただけだ。今おやっさんが、天涅君の家に行っているだろ。多分その後こっちに来てくれるはずだ。その時に聞けばいい。」
「うん。でも、天涅が飛び出して来た理由って、やっぱあいつのじいちゃんと関係してる気がする。初めて会った時だって、じいちゃんになんか言われて飛び出して来たって言ってたし。くそっ、何でオレん家に来なかったんだ。そしたらこんな風にはなってなかった

のに。」
シーツをギュッと握った。
その時、病室のドアが開く音がした。じいちゃんか、と思って振り向いた。
「あれ、じいちゃんじゃなくて火祭？」
「お前のじいちゃんじゃなくて悪かったな。それより、天涅は？」
火祭が近付いて来て、さっきの自分と同じ事を聞いた。
「大丈夫。眠ってるだけ。」
「そっか。ったく、心配かけやがって。」
天涅の寝顔を見て安心する火祭。
「てっさん、火祭呼んだの？」
「呼んだって言うか、こいつから電話かかってきたんだ。おれの帰りが遅いってな。そしたら事情説明しないといけなくて、結局ここに来るって言い出してな。」
「なるほど、そういうことか。じゃあ、後はじいちゃんが来て何があったか聞くだけだな。」
そう言ったものの、ただ待つだけというのは辛かった。
病室の中を無意味に歩き回ったり、貧乏ゆすりをしたり、イライラしながら待ち続けた。

それからしばらくして、ようやくじいちゃんが来た。待っている間のイライラがかなりつのっていて、もう少しで爆発するところだった。
「じいちゃん、遅い！」
「文句言うな。」
ベッドに近付いてきながら言った。
「おやっさん。お疲れ様です。」
「ああ。おっ、健吾君も来たのか。」
「あっ、はい。」
ぎこちなさそうに言う火祭。

「あれ、そういえば、じいちゃんと火祭って初対面じゃなかったっけ？」
「そうか。今までは写真でしか見た事なかったから、初対面になるな。初めまして。わしが、君の親父の元組長だ。」
「ど、どうも。初めまして。」
じいちゃんの威圧感に押されている。そういえば、なんだかいつもと違う感じがするのだが何でだろう。なんか怒ってる感じするな…って、何呑気な事考えてるんだ。天涅の事を早く聞かないと。
「じいちゃん、天涅の家行って来たんだろ。天涅が飛び出した理由分かったのか？」
「ああ。」
そして、ちらっとてっさんを見た。てっさんは何が分かったのか頷いた。
「いいか、落ち着いて聞け。大声は絶対出すな、ここは病院だ。」
何故か最後の方はオレを見て言った。
「分かってるに決まってんだろ。」
「なら、いい。実はな…。」
そうして、じいちゃんは天涅の家で話した事を全部話してくれた。

　聞き終わってから、驚きが半分以上あったが、どうすればいいのか分からない不安な気持ちもあった。じいちゃんが天涅の知り合いだったっていうのにも驚いたが、オレと、天涅が双子の兄弟だという事にもっと驚いた。でも、とてもじゃないけど信じられなかった。しかも、これからじいちゃんが面倒を見ることになったということは、一緒に住むという事になる。別に悪くはないが、これから友達としてではなく、兄弟としてどうやって接すればいいのか分からなかった。それに、まだ天涅はオレと兄弟だっていうことは知らないらしいし、それを知った時天涅はどんな表情(カオ)をするか恐い。ん、待てよ、何か大事な事を忘れている。天涅はまだ、オレの家で暮らす事に賛成してない。そりゃあ、じいちゃんが預かるとは言ったもの

の、やっぱり本人の意見を聞かないといけないいんじゃないのか？それ以前に、あの家を出て行くって本気で言ったのか？もしかしたら勢いに乗って言っちゃったとかだったらどうするんだ？
「おい、光。何をそんなに考えているんだ。」
じいちゃんが、頭を抱えて黙り込んでしまったオレに言ってきた。
「だって、いろいろと考える事が…。天涅がどう思ってるとかまだ全然分かってないし、それにいきなり本当は兄弟でした、とか言われてもどうすればいいんだって感じで…。」
「大丈夫か、光。目が回ってるぞ。」
「マジかよ〜。本当に回ってる気がする〜。」
火祭がオレの顔を覗き込んで言った。
もう、何がなんだか…
「光、落ち着け。お前がおかしくなってどうする。今一番辛いのは、天涅君なんだ。天涅君が目を覚ました時に、力になれなくてどうするんだ。」
じいちゃんが背中をバンと強く叩いて言ってくれた。確かにそうだ。オレが混乱していたら、天涅に何も言ってやれなくなる。
「そうだよな、確かに一番辛いのは天涅だよな。家まで飛び出すくらいだし。でも、早く目を覚ましてくれないかな。天涅が、どう思っているかも聞きたい。」
未だに眠っている天涅の顔を見て言った。
一体、いつ目を覚ますのだろうか。

九

目を開けると、見えた物は白一色だった。首を横に傾けても、真っ白だった。でも、上を向いていた時と違って、窓があり、そこから光が差し込んできていた。今度は逆の方に首を傾けてみると、やはり白だったが、ドアがあった。そして、目線を下げて右腕を見てみると、紙テープで止められた針が刺してあり、その針は上に伸びる

管に繋がっていた。さらに管は、ビニールの容器に繋がっていた。それを見て眉間にしわを寄せ、上を見上げた。その時、ドアを叩く音がして、女の人が入って来た。

「失礼します。」

そう言いながら入って来た女（ひと）は、さっき見た右腕に刺さった針に繋がっているものを持って来た。

　こっちに近付いて来ると、少し驚いたような表情をして言った。

「あら、目が覚めたのね。」

どうやら向こうは、こっちの事を知っているらしい。

「点滴を新しいのに変えるからね。」

柔和に微笑んで、右腕についている紙テープを剥がして針を抜き取った。そして、素早い動きで新しく持って来た点滴の針を刺した。全く痛みは感じなかった。

「はい、できあがり。もう少ししたら先生を呼んでくるから、待っててね。」

にっこり笑って言ってくれたのだが、はいと頷く前にさっきから気になっていた事を聞くことにした。

「あの、ここどこですか？」

相手は一瞬何を聞かれたか分からないという顔をしたが、勝手に納得して答えてくれた。

「…ああ、そっか。昨日は意識失ってたのよね。ここは病院よ。あなた昨日の事覚えてる？」

「いいえ。」

「昨日ね、あなた、雨の中道端で倒れていたらしいの。そうしたら丁度知り合いの方が見つけてくださって、救急車を呼んでくれたのよ。」

「…。」

何も言えなかった。そんな記憶など全く無かった。

「あら、覚えてないの？」

「はい。」

そう言うと、相手が驚いた表情をした。しかし、最初に驚いた表情をした時よりもっと激しい表情だった。
「えっ！？あなたもしかして、自分の名前とか分かる？」
なまえって何だ？とにかく分からないので、さあと言って首をかしげた。すると、ちょっと待っててをどもりながら言って、慌ただしくドアから出て行った。それを見ながら、なまえを分からないだけでそんなに慌てることなのかと思っていた。
　それから少しして、さっきの女の人と、今度は白い服を来た男の人が来た。この男(ひと)が先生というものなのだろうか。
「先生、早く診てあげてください。」
女の人が急かすように言うが、男の人は落ち着いたようにゆっくりこちらに近付いてきて、側にあった椅子にどかっと座った。
「やあ、おはよう。」
「おはようございます。」
そんなに太くない柔らかい声でそう言った。
そう言うと、顎に手を当てて、ふさふさ生えている白毛を撫でた。
「ふむ。君は、名前が分からないと言ったんだね。」
「はい。」
「そうか。ちなみに言うが君は、望月天涅というんだ。さて、いくつか質問してもいいかな。」
「はい。」
そうして、この色は何だとか、この物の名前は何だとか聞かれた。
「ふむ。色や物の名前は分かるというわけか。じゃあ、今度は質問を変えよう。」
今度の質問は、自分の生年月日や、家族構成や、友達の名前や、いろいろ自分に関する事を聞かれた。だが、最初の質問とは違って何も答えられなかった。
「ふむ。そういう事か。君は、何か大きなショックがあって、一時的な記憶喪失になっている。」
記憶喪失？だから、何も自分の事が分からなかったということか？

「大丈夫。そんなに心配することじゃない。何かの反動で一気に思い出せる。とにかく、今はただ安静にしておかないといけないな。それじゃぁ、お大事に。」
そう言って、椅子から立ち上がって女の人と一緒に出て行った。
「何か大きなショック…。なんだろ、それ。」
さっき男の人が言った言葉が、やけに引っ掛かっていた。

それからお昼頃、また同じ女の人が入って来た。今度は点滴ではなく、食べ物を持って来た。
「体の方は調子を戻してきたみたいだから、ご飯を食べても大丈夫よ。」
そして、腕に刺してあった針を抜いてくれた。
「それだけじゃ、お腹がすくかもしれないけど、病人食だから我慢してね。」
そう言って、去って行った。
それから、出された物を全部食べ終えたが、女の人の言った通りお腹が空いた。ちゃんと食べたのにな、と思いながらも空腹を紛らわせる為、眠ることにした。
しばらくして、誰かの話し声が聞こえた。うっすらと目を開けると、スキンヘッドのおじいさんと、革ジャンを着たおじさんがいた。
「天涅君、まだ寝ていなさい。」
「起こして悪かったな。」
そう言われたので、眠気に負けてまた目をつぶった。
また何時間か眠った後、目が覚めた。今度は誰かがいたというわけではなく、自然に目覚めた。
目を開けると、朱色の光が窓から差し込んでくるのが分かった。ベッドから抜け出して窓に近付いて行くと、奇麗な夕日が見えた。真ん丸で、トマトみたいな色をしていた。その夕日が辺りの空や、下に広がる町並みに降り注いでいた。奇麗の一言しかなかった。それにみとれていると、ドアが開く音がした。振り返ると、どこかの

学校の制服を着た男子二人が入って来た。手には鞄を抱えていて、学校の帰りだということが分かった。見覚えが無い二人なのだが、なんだか引っ掛かりがあった。二人ともどこからどうみても不良にしか見えないのに、自分とどういう関係なのだろう。
「よう、天涅。」
何故か無理な作り笑いをして、ピアスをつけていて、髪の毛に所々金髪が混じっている人が言った。
「もう体調はいいんだって？」
今度は、隣の人が同じような作り笑いをして聞いて来た。その人の髪の色は、上の部分が黒で、舌の部分が金色という不思議な色をしていたので、思わず目がいってしまった。
二人ともこちらに近付いて来るが、自分は窓から動かなかった。
「な、なあ、天涅。率直に聞くけど・…記憶喪失って本当か！？」
ピアスの人が作り笑いを崩して、眉毛を八の字にして聞いてきた。
いきなりの表情の変化に驚いたが、本当なので頷いた。
「じゃあ、おれ達のことも覚えてないのか？」
髪の色が不思議な人が言った。
引っ掛かりはあるが、覚えてはいないのでまた頷いた。すると、ピアスの人がずんずんとこっちに近付いて来た。何かと思っていると、いきなりがしっと肩を掴まれた。
「マジで覚えてないのか？オレの事も、火祭の事も？」
真剣な表情で問い掛けてくるが、全く覚えはなかった。
「覚えてない。」
「そうか…。」
肩から手を放して、脱力したように項を垂れた。
「光。お前ちょっとベッドにでも座っとけ。」
髪の色が不思議な人が、ピアスの人をベッドに座らせながら言った。
ピアスの人はへなへなと、力無く座った。
「天涅。お前、自分の事も忘れちまったんだろ。でも、絶対思い出せるようになるからな。おれ達が思い出させてやる。」

髪の色が不思議な人がピアスの人と同じように、真剣に言ってきた。
この人達は一体自分にとってどういう存在なのだろうか。
「じゃあ、まずは自己紹介からだ。おれは火祭健吾。それでこっちは…」
ベッドに座っているピアスの人をつついた。
「大野光。なあ、天涅。思い出してくれよ~。ほら、オレと初めて会ったときはさ…。」
「ちょっと待て。まずは天涅に認識させないと。覚えたか？おれが健吾で、こっちが光だ。」
髪の色が不思議な人が、まず自分自身を指して、次にピアスの人を指して言った。
「健吾に、光？」
自分もそれぞれを指して言った。
「そうそう。正解。」
そう髪の色が不思議な人が言った時、ピアスの人がこそっと耳打ちした。
「あっ、でも天涅いっつも火祭の事健吾じゃなくて、火祭君って呼んでただろ。」
「そうだっけ？でもよう、このさい君付け直んねーかな。光だけ呼び捨てで、おれだけ君付けってなんか差を感じるなー。」
「だけど、いままで通りの方が思い出す確立も高くなるんじゃないか？」
「そうか？」
「そうだって。」
「じゃあ、仕方ないな。」
ここまでこそこそ二人で話していた。だが、内容は全部こっちに丸聞こえだった。
「天涅、こいつは火祭君だ。ちなみにオレは光な。」
「あ、うん。分かった。」
ピアスの人が光で、髪の色が不思議な人が火祭君らしい。

「それじゃあ、おれ達がいろいろ教えてやる。ほら、光。天涅と場所交換だ。」
火祭君が言って、光がベッドから立ち上がって場所を交換した。別に交換しなくても、一緒に座ればいいのにと思いつつ座った。
　それから、二人の事を順番に教えてもらった。初めて二人を見た時より、いろいろ分かったのでなんだか知っているような気になってきた。しかし、思い出したとは言えなかった。
「やっぱそう簡単には思いだせないよなー。」
光が溜息混じりに言った。
「ねえ、二人はボクの友達？」
この二人と自分の関係はそうなんじゃないかと薄々思ってはいたが、まだはっきりと聞いていないので、尋ねてみた。
「当ったり前だろ。」
光が、ニッと笑って言った。
「そっか。なら早く思い出さないと。」
「天涅、焦らなくていいんだぞ。ゆっくり思い出せばいいから。」
火祭君も笑って言ってくれた。
「うん、ありがとう。…あのさ、一つお願いしていい？」
「何だ？何でも言えよ。」
光が身を乗り出して言った。
「ボクの事、教えてくれない？二人の事聞いてたら、自分の事全然分からないのが不安になってきたんだ。だから、ボクの事で知ってる事があれば教えてほしい。」
すると、光が身を引いて、火祭君と顔を見合わせた。そして、不安げな表情をしながら、今度はこっちに聞こえないようにこそこそ話した。
　しばらくして、頷きあった二人が言った。
「天涅、お前が知りたいって思っているんなら教えてやる。」
「お前の事で、知ってる事は全部だ。」
何故か二人とも深刻そうな表情をしているのだが、そんなに自分の

事は話しづらいのだろうか。しかし、自分の事も分からない不安は確かにあるので、聞く事にした。
「じゃあ、まず天涅が引っ越して来た事から始めよう。」
光が言って、火祭君と交互に、望月天涅について話してくれた。

全て聞き終わった頃には、日が完全に沈みつつあった。あまり話しがストレートには進まずに時間が掛かったのだ。
二人から話を聞き終わった後、しばしの沈黙が訪れた。
「天涅、あんまり落ち込むな。」
「そ、そうだぞ。人は辛い事だってあるけど、良い事だってあるんだから。なっ。」
二人ともあたふたして、何も言わないボクを気遣うように言った。
そんな二人がおもしろくて、思わず小さく笑ってしまった。
「あっ、笑った？何かおかしかったか？」
光が言うと、
「もしかして光の言い方とかか？かなり焦ってたもんな。」
火祭君がにやつきなら言った。
「おい、何だよそれ。焦るだろ、フツー。」
今度は怒ったように光が言った。
「ハハハ。さっきから見てたら、表情がころころ変わるからおもしろくて。」
そう言うと、今度はポカーンとした表情になって言った。
「天涅、それ前にもオレに言ったぞ。」
「え？そうなの？」
笑いが治まらないまま、聞いた。
「じゃあ、ちょっとでも思い出したとか？！」
光がパッと顔を輝かせて言ったが、
「それは違うだろ。」
という火祭君の言葉でがっくりと肩を落とした。
「早く二人の事思い出せたらいいのに。」

「「え？」」
「なんか二人といると楽しいな。記憶があったときのボクはもっと楽しかったんだろうなって思っちゃって。」
そう言うと、二人ともまた声を揃えて、じんとしたようにボクの名前を口にした。
「「天涅。」」
「二人ともありがとう。ボク、自分の事聞けて良かったよ。」
自然に笑みがこぼれ出てきた。
「そうか、そうか。なんか、前の天涅より素直だな〜。」
光ががしがしと頭を撫でて言った。
「確かに。元々良い奴だけど、もっと良い奴になった気がする。」
火祭君がバシバシと背中を叩いて言った。
二人とも結構痛かったが、そこは我慢することにした。
するとﾞ、ドアが開いてあの女の人が入って来た。
「あら、もう夕食の時間よ。」
その声にはっとして、光と火祭君が振り返った。
「もうそんな時間！？」
「あ、じゃあ、おれ達帰りますんで。」
そして、こちらを振り向いた。
「じゃあな、天涅。また明日来るから。」
「じゃあな。あんまり焦るなよ。」
「うん。ありがとう、二人とも。」
そして、女の人にも律儀に挨拶をして去って行った。
「良いお友達ね。」
夕食のトレイを、ベッドについている台の上に置きながら言った。
「はい。二人の事とか、ボクの事をいろいろ教えてくれたんです。」
「それは良かったわね。」
にっこり微笑んで女の人が言った。自分もつられて、笑みが漏れた。
「あっ、そうそう。これ、あげる。」
そう言って差し出されたのは、紫色をした手のひらサイズの巾着袋

だった。
「この中にね、ラベンダーの香りが詰まってるの。鼻に近づけたら匂いするでしょ。」
言われてやってみると、たしかに匂いがした。ラベンダーがどういう花のか分からないが、こういう匂いがするのだろう。
「私ね、昔階段から転げ落ちて入院した事あるの。その時体は擦り傷ですんだんだけど、頭の打ち所が悪かったらしくて、一時的な記憶喪失になっちゃったの。自分の事も、周りの人の事も全部忘れちゃって、凄く不安だった。でもね、私を担当してくれた看護婦さんがとても気を使ってくれたの。その時の私は凄く不安だったんだけど、その看護婦さんは言ってくれたの。」
そして、頭に手を乗せられて優しく撫でながら言った。
「こうやって、チチンプイプイなくなった記憶よ、戻って来ーいってやってね。それから、桜色の匂い袋を渡してくれたのよ。その時ね、男の子には紫色で、女の子には桜色よって教えてもらったの。でね、この匂い袋は、不安な気持ちを抑えて、楽な気持ちにしてくれる、いわばリラックス効果があるって教えてくれたってわけなの。そして、記憶を取り戻すのはゆっくりで良い。焦ったら逆につらいのよって言ってくれたの。」
懐かしそうな表情をして、話してくれた。でも、
「その時の私小学生だったんだけど、高校生の男の子にこういう事しても迷惑だったかしら？」
そう申し訳なさそうな顔をした。
「そんな事ないです。ボク凄く安心できました。さっき、あの二人にボクの事聞いたって言いましたよね。でも、ボクの事を聞いても、自分の事のようには思えなかったんです。どう聞いても、他人の事のように思えてしまって、早く思い出さないとって本当は焦る気持ちがあったんです。でも、さっき話してくれた事と、これのおかげでゆっくり思い出せばいいんだって思えました。ありがとうございました。」

軽く頭を下げて言った。そして、顔を上げて女の人を見ると、嬉しそうに顔がほころんでいた。
「本当に？良かった〜。私周りからおせっかいだって言われる事が多いんだけど、いつもやってしまってからおせっかいだったかなって思っちゃうんだけど、そう言ってくれると凄く嬉しいわ。あっ、そうだった。その匂い袋にはもう一つ意味があるの。」
「意味？」
「明日、はれて退院できます！おめでとう！っていう私からのプレゼント。」
「退院ですか？でもボクまだ記憶が…。」
「体の方は万全だからよ。記憶はね、ここにいるよりも家に帰った方が戻りやすいのよ。」
「そうなんですか。」
「ええ。さあ、ご飯が冷めちゃうから早く食べないとね。明日の退院の事は、後で先生が来ていろいろ教えてくれるわ。それじゃあ、また後でね。」
「はい。ありがとうございました。」
そして、にこっと笑って出て行った。
「退院か。」
誰もいなくなった部屋でボソッと呟いてみた。
　光と火祭君の話をきいたところ、自分が元一緒にいた家族はなんら関係もない赤の他人だったらしい。そして、自分は家族に見放されたのを知って家を飛び出し、雨の中道端に倒れていたのをてっさんという火祭君の父親に助けられたらしい。そして、自分は光と双子だという。これからおそらく一緒に暮らすと思うと言っていた。だから、退院したら光の家に行くのだろう。でも、一度一緒に暮らしていた家族と会ってみたいと思った。その家族が原因でここに入院する事になって、記憶を失ったのだったら、その家族と会ってみたら何か思い出すかもしれないと思ったからだった。
　記憶を取り戻した時、自分はどうなるのだろう。今まで家族だと

思っていた人達が本当は家族じゃないって知ったらショックなんじゃないかと思う。というより、ショックだったんだ。多分そのせいで記憶が失われたのだ。だとしたら、思い出した時、ショックは激しいのでは？そう考えると不安になってきてしまう。
「はー。」
溜息をついて、先程もらった匂い袋を嗅いでみた。すると、ふわ～んと鼻の中に匂いが広がり、気持ちが落ち着いた。これをもらえて良かったと心底思った。
なんだか、いろいろな人達から支えられてばかりだが、自分で立ち上がらないといけない時は、周りに甘えてちゃいけない。だから、記憶が戻った時はめげずにちゃんと受け止めなきゃいけないんだ。今から怖気図いてちゃ話にならないだろ、と自分を叱咤した。そしてまた、あの匂い袋を嗅いで心を落ち着かせた。

次の日。午前中には部屋を出て行く準備を済ませた。病室で待っていると、どこかで見覚えのあるおじいさんが来た。
「天涅君、退院おめでとう。」
スキンヘッドが目立っていて、よく通るしわがれた声が印象的だった。
あれ、そういえばこの人昨日来た？と思っていると、ドアが開いて光が入って来た。
「よう。退院できて良かったな。」
「ありがとう。」
「光、今日学校はどうしたんだ！」
おじいさんと光は知り合いらしかった。
「ちょっと早引け。だってオレの兄弟が退院するんだぜ。ちゃんと先生に言ったから大丈夫。」
どうりで制服だったわけだ。
「ちょっと待て。まだ学校には二人が本当の兄弟だとは言ってないんだぞ。」

「ああ、どうりで驚いてた訳だ。ま、いいじゃん。いずれ分かる事なんだから。」
「お前なあ…。」
呆れたようにおじいさんが肩をすくめた。
「それより早く行こうぜ。」
「そうだな。天涅君、これから一緒に住む事になった。よろしく。」
手を差し出される。慌てて握った。
「よ、よろしくお願いします。あの、光のおじいさんですか？」
「ああ。でも、これからは天涅君のじいさんでもある。光からわしの事は聞いたかな？」
聞かれて、首を縦に振った。
「はい。昨日全部教えてもらいました。」
「そうか。なら問題はないな。それじゃあ、行くとするか。」
そして、お世話になった部屋を後にした。
玄関に向かうために廊下を歩いていると、あの女の人がいるのをみつけた。一言御礼を言おうと声をかけた。
「あら、今から行くの？」
「はい。いろいろお世話になりました。」
「いいのよ。焦ったり、不安になったらあの匂い袋を嗅いでね。記憶なんてすぐ思い出せるから。頑張ってね。」
「はい。ありがとうございました。」
「気をつけてね。」
「はい。」
そして、その人は光とおじいさんに礼をして去って行った。
「あの人良い人みたいだな。」
光が女の人の後姿を見て言った。
「うん。すごく良い人だった。」
もう一度、心の中で礼を言って、その人から目を離して玄関へと向った。
こうして、短かった生まれて初めての入院生活は終わっていった。

十

光とおじいさんに連れて来られたのは、古い一軒家だった。
「見ためこんなんだけど、案外中は広いから。ちゃんと天涅の部屋もあるぞ。」
光が言って、中に入って行った。それに続いて自分も入った。
「じいちゃん、天涅を部屋に連れてくから。」
「ああ。ついでに家の中を見せたら良い。」
「うん、そうする。天涅、こっちだ。」
キョロキョロ家の中を見ていたが、光に呼ばれてついて行った。
光は廊下に出て、先程入った部屋の隣の襖を開けた。
「ここが天涅の部屋。一応箪笥と、棚と、布団と、机っていっても丸テーブルだけど、あるにはある。でも、天涅の服とか、必要なものはまだ持って来てないんだ。今日ぐらいに持って来るからさ。」
中央に置かれた丸テーブルに、入院した時の荷物を置いた。大した物じゃなく、手提げバッグ一つぐらいな物だが。
「うん、ありがとう。」
「それじゃあ、家の中見て回るか。」
そして、光が家の中をいろいろ教えてくれた。広いといっても、そんなに部屋があるわけではなく、部屋の中一つ一つが広いのだ。風呂場も大きい方だった。
全部見終わった後、最初に入った部屋に行った。そこには、おじいさんがこたつに入ってお茶を飲んでいた。既に、光と自分の分もあった。
「天涅君、一通り見たかい？」
「はい。これから宜しくお願いします。」
頭を下げて言った。
「こちらこそ、よろしく。」
おじいさんも軽く頭を下げて言った。

「なあ、じいちゃん。天涅の服とか全部向こうの家にあるんだろ。」
「ああ、それなら向こうの人達にお願いした。荷物ぐらいまとめてあげろって言ってな。そろそろあいつが持って来るだろう。」
その時、丁度玄関の呼び鈴が鳴った。
「丁度良いな。」
「オレ出てくる。」
光が立ち上がった。
「ボクも。」
自分の荷物なので、自分で行かなければと思い立ち上がった。
玄関に行くと、昨日おじいさんと病院に来た革ジャンの人が玄関を開けていた。
「てっさん、荷物は?」
「車の中だ。」
それを聞くと、近くにあったサンダルをひっかけて、外に行った。
「天涅君、退院おめでとう。」
低いがよく通る声で、てっさんが言った。
「ありがとうございます。あ、荷物まですいません。少しでも天涅くんの為になれればいいんだ。健吾がな、あっ、健吾っていうのはおれの息子なんだけどな。学校じゃあいっつも独りだったあいつに、声かけてくれたのは天涅君が初めてだって言って喜んでたんだ。いわば初めての友達なんだ、天涅君は。毎日嬉しそうにしてるあいつを見てるとこっちも嬉しくなってきてなあ。親ばかっていわれるかもしれないが、そうなんだ。
光だってそうだ。これは前にも言ったんだけどな、あいつ、小さい頃から見栄っ張りで、親のいないことや捨て子だって事を言われてきたんだ。一応空元気は見せていたが、本当の笑顔はなかった。そしたら、天涅君にあってからなんか元気になってな、楽しそうなんだ。天涅君の事話す時、今まで見た事ないぐらい嬉しそうな顔をしている。天涅君と兄弟だって分かって複雑そうな顔をしていたけ

ど、一番嬉しかったはずだ。そんな光を見ても、やっぱり嬉しいと思うんだ。だから、こうやって二人を笑わせてくれた天涅君には感謝している。それにこれからおやっさんの孫になるんじゃないか。
「遠慮はいらんよ、天涅君。」
てっさんの恐そうに見えた目元が、笑みの形になった。すごく優しそうな目だった。なんだか、とても懐かしくて、感じた事のある感情が湧き出してきた。この気持ちが何なのか分からなくて戸惑っていると、心配したてっさんに名前を呼ばれた。はっとして、なんでもないと答えた。
その時、てっさんの車からダンボール箱を二つ積み上げて光が持って来た。そして、ドサッと玄関に置いた。
「ふー。やっぱ本類は重いな。」
「え、二つとも本しか入ってないの？」
そんな重たいものをどうやってと聞くと、
「まさか。下のダンボールだけ。上は衣類。天涅、これ部屋にもって行って整理しようぜ。てっさん、後小さいのがいくつかあるっしょ？それ持って来てくんない？」
光に言われ、ああと答えてからてっさんが車の所に行った。
「オレが本類持って行ってやるから、天涅は衣類持てよ。」
「うん、悪いね、思いの持たせちゃって。」
「いいって。気にすんな。」
そして、それぞれダンボール箱を運んで行った。
　部屋に運んで、中身を出していると、てっさんが残りの小さい箱や袋を持って来てくれた。礼を言うと、ああと答えて居間に行った。
「荷物少ないんだな。」
「そうみたいだね。楽で良かったよ。」
記憶が無いので、自分の物という保証が無かった。今はっきりと自分の物だと言えるのは、昨日あの女の人から貰った匂い袋だけである。
　それから、光と一緒に荷物を整理した。物も少ないのであっとい

う間に片付け終わった。以前の部屋と変わった事は、棚の中に本や小物が並んだという事だけである。
「なんか殺風景だな。」
「光の部屋もこんな感じだったけど？」
先程見た光の部屋を思い出して言った。
「ここまでじゃないぞ。オレの部屋は、実は見えない所に物が詰まってるんだ。それに、自分の部屋なんてあんまり使わないし。寝るだけとか、テスト期間に猛勉強する時にしか使わないからな。」
「そっか。じゃあ普段は居間におじいさんと居るんだ。」
「まあな。さて、荷物整理も終わったし、オレらも居間に行こうぜ。」
「うん。」
そして居間に向かうと、おじいさんとてっさんが何か話していたが、襖を開けるとすぐ話すのを止めた。不思議に思ったが気にしない事にした。
「荷物整理は終わったか？」
おじいさんが聞いてきた。
「うん。天涅の荷物少ないからすぐ終わった。」
光が、おじいさんとてっさんが座っている向かいがわに腰をおろした。その隣に自分も座った。
「天涅君、まだ持ってきていないのがあるんだ。」
てっさんが言った。
「何ですか？」
「犬なんだけどな、さっきは車に乗せて来れなかったんだ。いつか連れて行くって言っておいたんだけど，自分で行くか？」
そう聞かれて、自分を捨てた家族に会いに行くチャンスだと思って頷いた。
「天涅、行くのか？」
光が驚いたように言った。
「うん。その人達に会ってみたいし。」

「会ってどうするんだよ。」
「会ったら、何か思い出すかもしれないし、ボクが記憶をなくした原因はその人達なのかもしれないから。」
「天涅…。じゃあ、オレも行く。」
「おいおい、光が行ってどうする。
おじいさんが待ったをかけた。
「いいだろ、別に。ただ一緒に行くだけだって。何もしねーよ。」
「ならいいが。」
と言ったが、疑っている風でもあった。
「いつ行く？」
光に聞かれて、今日と答えた。
「じゃあ、昼飯食ってからにしようぜ。腹減った。」
お腹をさすりながら光が言った。そういえば昼ご飯はまだだった。
既に十二時を過ぎていた。
「てっさんも食べてく？」
「そうだな。何かあるのか？」
「ラーメン。丁度四つある。」
「じゃあ食ってくか。」
「分かった。ちょっと待ってて。」
そう言って、台所に行った。自分も手伝わないとと思って、光と一緒にラーメンを作った。
　ラーメンを食べ終えてから、光と一緒に家を出た。
「天涅の元の家まで十分ぐらいだからすぐ着くぞ。」
「うん。」
「なあ、やっぱり早く記憶取り戻したいか？」
前方から吹き付ける冷たい風に身を縮めながら言った。
「うん。焦るつもりはないけど、早く思い出せたら良いって思うから。」
「そっか。オレ、あんまり力になれないから何もできなくて、なんか悔しいんだよな。」

光が唇を噛みしめて言った。
「何言ってるんだよ、ボクは凄く助かってるよ。いろいろ教えてくれたり、今だって一緒に来てくれてるじゃん。」
「天涅、お前って本当に良い奴だな。お前が兄弟で良かったよ。」
嬉しそうに破顔して言った。その光の顔を見て、てっさんが言っていた、てっさん自身も嬉しくなる笑顔はこれなんだなと思った。でも、自分が光を笑わせている？そうなのだろうか。
　そんな事を考えながら歩いていると、前からおじいさんと小さい男の子の二人組みが歩いてきた。おじいさんは優しそうな表情をして、男の子も嬉しそうな表情をして歩いてきた。
「それじゃあ、じいちゃんと一緒に公園で遊ぼうな。」
「うん、このボールで遊ぶんだ！あっ！」
嬉しそうに言っていた男の子の手から、まだ真新しいサッカーボールが転げ落ち、自分の足元に転がってきた。
　ボクは、ゆっくりとサッカーボールを手に持った。
「お兄ちゃん、ありがとう！」
まだ小さい手を伸ばして、男の子が言った。
「はい。」
そう言って、渡してあげた。
「ありがとうな。」
おじいさんが人の良い笑みで言った。
「あ、いえ。」
「じいちゃん、行こう！」
「ああ。」
そしておじいさんは、会釈をして男の子と去って行った。そして、ボクはその二人組みを思わず目で追っていた。
「天涅？」
「…なんか、ああいうおじいさん、知ってる気がする。さっき、あのおじいさんと男の子見て、何でかあの男の子が自分に重なって、おじいさんが、誰かの顔をしてたんだ。」

「天涅、それって思い出したんじゃないのか？今は亡くなっていないけど、お前のじいちゃんはすごく優しい人だって、前言ってたぞ。」

光が嬉しそうに言った。

「じいちゃん…。」

呟くと、温かい感情と、恐怖に似た感情が胸の中に生まれた。この感情はなんなのだろう。それに、今は亡くなっている自分の祖父は優しい人だったはずなのに、恐怖に似た感情は何なのだろう。思い出せそうなのだが、思い出せない。もしかしたら、思い出したくない何かがあるのだろうか。

「天涅、どうしたんだ？」

動こうとしない自分を心配したのか、光が聞いてきた。その言葉に反応して、思考から抜け出た。

「なんか、思い出せそうで思い出せないんだ。何でだろう…。思い出したいのに。」

「大丈夫だ。絶対思い出せる。今だって思い出す寸前なんだろう。」

自信に満ちた声で言った。その言葉を聞いて、こっちまでも自信を持てるような気がした。そして、ポケットに入れてきた匂い袋を取り出して匂いをかいだ。

「あれ、それ何だよ。」

光に聞かれて、病院であの女の人から貰った事を告げ、ついでに何故貰ったかも言った。

「へえ。すっげー良い人なんだな。良かったな、天涅。」

「うん。すごく落ちつくんだ、これ。」

そう言って、ポケットに入れた。

　そしてしばらく歩くと、ある一軒の家の前で光が止まった。

「ここだ。」

「ここ…か。」

門の両脇にある枯れ木を見て、目の前にある家を見た。光の家よりは古そうではないが、長年建っていそうな感じがしていた。

少し緊張しながら、一歩踏み出した。庭に入るとどこからか犬の鳴き声が聞こえた。庭の隅を見ると、犬小屋の側で柴犬が鳴いていた。そして、凄い勢いで近付いてきた。
「うわっ！！」
驚いてしりもちをついてしまった。犬は、嬉しそうに尻尾を振ってペロペロ舐めてきた。
「く、くすぐったいって！」
「ワン！」
「すっげー嬉しそうだな、チャコ。」
光が犬の頭を撫でて言った。ボクは、犬を落ち着かせて立ち上がった。
「チャコっていうの？」
「ああ。お前がそう呼んでたけど。」
「そっか。でも、可愛いな。」
首元をくすぐってやったら、気持ちよさそうにワンと鳴いた。
そうしていると、玄関がガラガラと開いて、女の人が出て来た。病院で会った人よりは年が上だった。
「天涅！それに光君も。」
その人は、驚いたように口元に手を当てて言った。
「天涅、育ててくれたお母さんだ。」
光が耳打ちしてくれた。
「お母さん？」
その人をじーっと見た。
「天涅、ごめんなさい。」
その人が近付いて来て、いきなり頭を下げて謝った。
「あんなに酷い事を言っちゃって…。もう我慢できない、なんて…。」
頭を上げずに言った。声が震えていた。でも、何の事を言っているのか分からなかった。
「おばさん、どういう事ですか？天涅に何を言ったんですか？」

光が、刺の刺さった言い方をした。
目の前の人は、頭を上げて目を涙目にして言った。
「…あの夜、お父さんが天涅に本当の事を話すって言って、全員を集めたの…。お父さんが天涅に、本当の事を言ったんだけど、酷い事も言ったの…。主人のお父さんに、恩をあだで返しったたって言って、責めたの…。そしたら、天涅が大声で怒鳴って、なんだか恐くなっちゃって…。そうしたら私、言っちゃってたの。もう我慢できない。あなたの事で、お父さんと、修一さんに責められるのはって…。そしたら、天涅が出て行っちゃって…。本当にごめんなさい！」
また頭を下げて謝った。
胸が締め付けられるような気がした。でも、思い出せない。そんな風な事があって、自分は家を飛び出したのか。頭を下げ続けている目の前の人を見ながら思った。
すると、ガラッと玄関を空ける音がした。その音に反応して、そちらを向くと今にも怒鳴りだしそうな顔をしたおじいさんがいた。
「そこで何をしている！」
顔の通り怒鳴った。その声を聞いて、心臓がドキッと鳴って緊張のせいで速かった鼓動が、一層速さを増した。
「お父さん…。」
下げていた頭を上げて、振り向いて言った。
「何でお前が頭を下げる必要があるんだ、みっともない！」
そう言いながら近付いてきた。
「みっともないって、何でそんな事を！ちゃんとおばさんは、自分の言った事に対して天涅に謝ってるじゃないか！」
光がそのおじいさんを睨んで言った。
「お前には関係ない！」
そのおじいさんも睨み帰して言った。
「おい！とっととその犬を持って行け。二度とここに来るな！」
チャコを指して言った。
「お父さん、そんな言い方しなくても！」

「お前は、こいつを捨てたんだろう。今更何を言っている！」
こちらを指しながら言った。ボクは何も言えなかった。いや、言えなかったんじゃなくて、何かが胸の中に詰まって、変なわだかまりがつっかえていた。何か思い出せそうな気がしたが、つっかえていて、思い出せなかった。この家に来る前に会ったおじいさんと孫を見た時のような感情とは、別な感じだった。
「天涅、行こう。これ以上ここにいてなんになる。」
最後の部分を、吐き捨てるように光が言った。
「そうだ、とっとと言ってしまえ。お前みたいな最低の奴など、もう見たくないわ。お前にもう居場所はない！」
「お父さん、やめて！」
「何故かばう！お前だって辛い思いをしてきただろう！だから、もう我慢できないと言ったんだろうが！こいつは、お前の夫の父親に世話になっていながら、恩をあだで返した奴なんだ！そんな奴をかばう必要なんて無い！お前だってそうだと納得したじゃないか！」
顔を鬼の形相にして、大声で怒鳴った。
「そうなの？やっぱりそう思ったんだよね…。」
自分を育ててくれた母親を見て言った。母親は、怯えたように身をすくめた。そして、おずおずと口を開いた。
「ごめんなさい…。あの時は、そう思ってしまったわ…。でも、今は本当に悪かったって思ってるの！ごめんなさい、天涅…。」
また謝った。その人の目から涙が、次から次へとあふれ出てきた。
「泣くな、みっともない！」
顔を覆って泣いてしまった母親に怒鳴った。そして、自分のほうを見て指を突きつけてこう言った。
「お前はさっさと立ち去れ！お前は必要ない存在なんだ、産まれた時からな！！」
その言葉を聞いた瞬間、ズーンという衝撃音が聞こえた気がした。脳と心に、何かがぶつかった衝撃がした。立っていられなくなって、体が前に傾く感覚があった。しかし地面に倒れる前に、光が受け止

めてくれた。
「おい、天涅！しっかりしろ！！」
そう言う声が遠くで聞こえた。その時、自分の頭の中にいろんな情景や言葉が飛びかかっていた。
父方の祖父が亡くなる前の楽しかった毎日の事。
父方の祖父が亡くなる寸前、自分は病室に入れず、父も自分のせいで死に際を見られなかった事。
ここに引っ越して来てから、母方の祖父に赤の他人だと思えと言われた事。
光と初めて会った時の事。
夜中に立ち聞きした、祖父と母の会話の事。
高校生活が始まった日に、火祭君と出会った時の事。
あの雨の日、祖父から自分が今まで家族だと思っていた人達と、血のつながりがないという事を聞いた時の事。その時のやりとり、自分が出て行ったこと、道端で倒れていた時に考えていた事。
全て思い出した。失っていた記憶を全て取り戻した。
光の、自分を支えてくれた腕をそっと振り解いて、自分の足で立ち上がった。
「思い出した。全部、思い出した。」
ゆっくりと、一言一言を発音した。
「本当か、天涅！」
光が驚いたように言った。それに答える為、首を縦に振った。
ポケットから、匂い袋を出して、匂いをかいだ。ラベンダーの良い匂いが鼻をついて、心を落ち着かせた。そして、それをまたポケットにしまった。
そして、俺を見ながら驚いた顔をしている母さんに言った。
「俺は家を飛び出した後、雨に打たれながら思ったんだ。俺は初めからいてはいけない存在なんだから、これ以上生きていてちゃいけないって。でも、よく考えてみたら俺の為にいろいろしてくれる人達がいる事に気付いた。母さんだって、本当の子供じゃないのに俺

の事ちゃんと育ててくれた。でも俺が恩をあだで返したから、母さんが責められたんでしょ。謝るのは母さんじゃなくて、俺だよ。俺のせいで母さんを苦しめて、ごめん。」
頭を下げて謝った。母ではなく、自分が謝る方が絶対正しいのだ。それに、謝りたかった。あの時家を出て行くんじゃなくて、謝りたかったんだ。
「天涅、あなたが謝らないで。私があなたを育てるって決心したのに、勝手にあんな事を言った私が悪いんだから。」
母さんが言った言葉を聞いて頭を上げた。
「母さん、もういいんだよ。俺はここを離れないといけないないし、結局母さんに何もできてない。やっぱり俺は、恩をあだで返しちゃったよね。」
「天涅、そんな事…。」
母さんが声を震わせて言った。俺はそんな母さんから目を反らしてじいちゃんを見た。目が合うと、憎悪の目つきでこちらを見て言った。
「記憶が戻ったんならさっさと出て行け！」
「出て行くよ。でも、その前に言っておきたい事があるんだ、じいちゃん。俺に父さんと母さんの本当の子供じゃないって教えてくれた時、いろいろ俺に言ったよね。凄く頭にきた。確かに俺は恩をあだで返した。だから、じいちゃんには本当の事を言われた。でも、あの言い方にむかついた。俺が本当にむかついたって事、分かってほしい。それと、むかついてたからっていって、酷い事言ってごめんなさい。…あと、今までこの家に住まわせてくれて、ありがとうございました。」
そして、頭を下げた。祖父には本当に腹が立っていたが、最後はきちんとお礼と謝罪をして別れようと思って言った。
「天涅、やっぱり行っちゃうのね…。」
母が呟いた時、背後から妹の声がした。
「天涅兄ちゃん！」

振り向くと、今学校から帰って来たという風に、ランドセルを背負って学校の帽子をかぶっていた。
「咲。」
「天涅兄ちゃん、戻って来たのに行っちゃうの？！何で！？」
妹が走り寄って来て言った。
「ごめんな、咲。行かないといけないんだ。」
「何で！天涅兄ちゃんが、アタシの本当のお兄ちゃんじゃないから？でも、アタシのお兄ちゃんは、天涅兄ちゃんだよ！」
必死の顔でこちらを見上げて来るが、どうしようもできなかった。
「ごめんな。俺、全然良いお兄ちゃんじゃなかったのに。それに咲にはもう一人お兄ちゃんがいるだろ。俺がいなくても平気だろ。」
「ダメだよ！和也兄ちゃんは和也兄ちゃんで、天涅兄ちゃんは天涅兄ちゃんだもん！」
そう妹が言った時、
「咲、もうやめろよ。」
という弟の声が聞こえた。弟も妹同様、学校から帰ってきたばかりのようだった。
「アニキはここにいられないって言ってるだろ。それに、本当の兄弟じゃないんだ。」
こちらに近付いてきながら言い、妹の横に並んだ。
「俺、アニキが本当の兄弟じゃないって知った時、ほっとした。じいちゃんが息を引き取る前に、足がすくんで病室に入れなかった奴が俺のアニキだなんて恥じだったから。でも結構酷い事言われたのに、母さんとじいちゃんに謝って、お礼を言ったのは正直凄いと思った。それに、よく考えてみればじいちゃんが亡くなる前は、アニキと一緒に遊んでたなって思った。アニキといると楽しかった。
　でも、あの時以来俺はアニキを恥じるようになって、アニキと距離が深まっていった。その時、俺は恥じっちゃいけなかったんだ。アニキを励ましてあげなきゃいけなかったんだ。ごめん、アニキ！」
勢いよく頭を下げて、弟が言った。まさか、弟が自分に謝るとは思

ってなかったので、しばらく唖然としてしまった。そして、はっとして慌てて言った。
「や、やめろって。何で和也が謝るんだよ。悪いのは俺なんだ。あの時、自分の殻に閉じこもらないで、謝ればよかったんだ。そしたら、こんなに溝は深まらなかった…。」
弟の頭を上げさせてそう言った。
「じゃあ、天涅兄ちゃんずっとここにいてよ！」
妹が俺の腕を掴んで言った。
「それは…。」
口ごもってしまった。でも、横から母さんが助け舟を出してくれた。
「咲、お兄ちゃんを困らせるのはやめさない。お兄ちゃんはね、これから本当の兄弟と暮らすのよ。」
「本当の兄弟って？」
「誰？」
「光君よ。」
まだ妹と弟は聞いていないのか、首をかしげて母を見た。
それを聞くと二人とも、いつのまにか庭の隅の方に移動していた光の方を見て驚いた。
「「え！」」
「いろいろあって、光君が天涅の兄弟だっていう事が分かったの。」
「じゃあ、アニキが住む所って…。」
「光君の家？」
自分を見て、驚いて二人が言った。
「ああ、うん。近いからいつでも会えるよ。」
「そうなの？じゃあ、たくさん会いに行く！」
「うん。でも、迷惑にならない程度にな。」
そう言って、妹の頭に手を置いた。
「でも、天涅兄ちゃんはこっちに来てくれないの？」
「それは、駄目かな。」
「何で？」

「咲、それは後で俺が教えてやるから。」
弟は何気に事情をよく知っているので任せる事にした。
「そろそろ行かないと。またな、和也、咲。」
二人の頭を撫でた。そして、母と祖父の方を向いた。
「母さん、今までありがとう。父さんにもそう伝えといて。それと、俺のせいでじいちゃんの死に際に会えなくてごめんって。」
「天涅…。ごめんね、手放しちゃって。」
眉を八の字にして、泣くのをこらえているような顔をして母さんが言った。
「もういいって。」
「天涅、ありがとう。風邪ひかないで、元気に過ごすのよ。光君と仲良くね。母さんも会いに行くからね。」
泣き笑いのような顔で微笑んでくれた。その微笑が胸を打って、熱いものが喉元にこみ上げてきた。でも、それをこらえて、最後に祖父に言った。
「じいちゃん、ここを出たら、もう二度と戻って来ないから。いろいろ不可解な想いさせて、ごめんなさい。」
もう一度頭を下げた。そして、頭を上げて言った。
「今までありがとうございました。それじゃあ。」
くるっと、門の方に向きを変えた時、呼び止められた。
「天涅。」
久々に、祖父が名前を呼んでくれた。
「たまになら…来てもいい。但し、あの犬を連れてだ。お前が来る前まではわしが育てていたんだ。少しばかりは、気になるからな。」
素直じゃない言い方だが、また来てもいいと言ってくれたのは嬉しかった。だから、また振り向いて礼を言った。
「ありがとう、じいちゃん。」
「たまに、だからな。」
そうボソッと呟いた。
「うん。」

俺はその呟きに笑顔で答えた。
　そして、門のところに行った。すると、母さん達が口々に一言ずつ言ってくれた。
「天涅兄ちゃん、絶対行くからね！」
「俺もたまーに行くかも。」
「天涅、いつでも来ていいからね。」
「…もう、恩をあだで返すような事がないようにしなさい。」
最後に、祖父に厳かに言われ、頷いた。
「じゃあね、天涅兄ちゃん！バイバーイ！」
妹が手を振って言った。
「バイバイ。」
自分も手を振りかえして言った。すると、母さんと弟も手を振ってくれた。それを見て、背を向けた。そして、これから向う自分の新しい家へと一歩踏み出した。
「天涅の家族って温かいな。」
「家族の前に元がつくけどね。」
「なあ、天涅。今までずっと一緒に住んでたのにいきなりいなくなっちゃって寂しくないのか？」
隣を歩いていた光が立ち止まって聞いてきた。光に紐を握られていたチャコも必然的に止まった。
「え？」
自分も止まって光を見た。でも、何故かぼやけていてよく見えなかった。瞬きをすると、頬を温かい水滴が流れた。それは、後から後から溢れ出て来た。
「あれ、何これ。なんか出てくる。何で…。」
ぐいぐい目をこすっても、水滴は止まらなかった。
「天涅、あんまり無理するなよ。本当は、家族と離れて寂しいんだろ。泣きたいんだったら、思う存分泣いちゃえよ。」
光が自分の肩に手を置いて言ってくれた。
「光…。」

俺は流れ出てくる物を拭こうとはせず、流れるがままにした。そして、近くの壁にもたれて、小さな子供みたいにしゃくりあげながら、声を上げて泣いた。
光の言った通り、寂しかった。心細かった。血は繋がってないと言っても、ずっと一緒に暮らしてきた家族だから寂しかった。憎まれて酷い事も言われたけど、でもやっぱり家族だから、いきなり離れると悲しかった。
でも、悲しいばかりではなかった。嬉しさもあった。弟と妹が、自分をどんな目で見ていたのか分かったし、弟は謝ってくれた。それに、かあさんも謝ってくれた。ありがとうとも言ってくれた。そして、じいちゃんが、もう二度とここに来るなと言ったじいちゃんが、たまになら来てもいいって言ってくれた。凄く嬉しかった。
悲しさと嬉しさが交ざった温かくてしょっぱい涙が、次から次から溢れ出て来た。
光は、道端で泣きじゃくる俺の横にずっと居てくれた。下校中の小学生や通行人が不審気な目で見てきたのにもかかわらず、ずっと側に居てくれた。それも嬉しくて、また涙が出て来た。涙が出なくなるまでずっと泣いていた。

「あー、スッキリした。」
涙がおさまってから、空を見上げて言った。
「良かったたな。」
光も同じように空を見上げて言った。
「うん。ありがとう、付き合ってくれて。」
「いいって。だって、オレら兄弟だろ。」
「…うん、そうだね。」
兄弟という言葉が嬉しくて笑みがこぼれた。
「じゃあ、行こうぜ。」
「うん。あっ、そうだ。チャコの小屋作らないと。」
「そうか。なら帰ってからすぐ作ってやろうぜ。」

「そうだね。待ってろよ、チャコ。」
そう言って、頭を撫でてやると、ワンと一声鳴いた。
それから、光と他愛も無い話をしながら新しい家へと帰って行った。

心が晴れて、今まで自分を覆っていたものがはがれていく感じがした。もう、自分の殻に閉じこもって、他人と関わり合いをもちたくないなんて思わない。
今まで自分は亡くなった祖父に絡めとられていた。でも、やっと逃れられた。あの時の事は、亡くなった祖父や、いろいろな人を悲しませてしまった。しかし、もうその悲しみは消えた。あの時の事を忘れようとする訳ではないが、記憶の片隅に置いておこうと思う。そうして自分は、ようやく前へ進めるのだから。

人と人との関わりはとても大事だ。それに人間は、絶対独りでは生きていけない。
もしかしたらそんな事を、天国にいる祖父は教えたかったのかもしれない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3874e/

暗き闇夜に差す光3

2010年10月12日17時23分発行